

2:

「くちゅ……れろっ……ちゅるっ……ナミさん……れろっ……ちゅるっ……セックスしたい……ちゅるっ……セックスしたいよお……れろっ……」

「ぢゅるっ♡ くちゅ♡ んあっ♡ れろっ♡♡ んっ……セックスはダメって……言ってるでしょ……れろっ♡♡ くちゅ♡」

（まったくもお！ 一度セックスしたら何度も何度もねだってきて！！ あんたのチンポ突っ込まれたら、こっちの身が持たないのよ！！）

ナミは今、立っている状態で男とベロチュウしながらゴム付きチンポを手コキしている。

強烈な処女喪失から数日、ロビンがいなくなったのを見計らっては男はナミにセックスをねだりまくっていた。

男にとっては泥棒猫ナミの手配書でも抜きまくっており、憧れの女の一人なので、ヤリまくりたいという気持ちを抑えられず行動に移しているだけなのだが、ナミとしてはそれを簡単に受け入れるわけにはいかなかった。

（この私としたことが不覚だわ……こいつと簡単にエッチしちゃうなんて……それに、このチンポ……気持ち良すぎて我を忘れちゃう……あんな醜態二度と見せないわよ……）

次期海賊王が乗る船の航海士としてのプライドで、簡単にチンポに屈しないように気を引き締めて男のチンポを沈めに掛かっているナミ。

今回は男に簡単に膣内射精を許さないように、しっかりとコンドームを用意している。

（別に挿入れて欲しいわけじゃないけど……こいつが性欲に任せて暴走しないようにゴムを用意しただけ……そう……別に挿入れて欲しいわけじゃないんだから）

辛うじての抵抗として男のチンポにコンドームを付けており、枕の下にも大量に隠し持っていた。

クニュッ！！ クニュッ！！ クニュッ！！ クニュッ！！

「くちゅ♡ れろっ♡ ぢゅるっ♡ んあっ♡ ほら、早く射精しちゃいなさい。れろっ♡ ぢゅるっ♡ 早くしないと、ロビンにバレるわよ。ぢゅるっ♡ れろっ♡」

「くちゅ！ れろっ！ 挿入りたい！ れろっ！ ナミさんの膣内にオチンポ挿入れてズボズボしたい！ れろっ！ くちゅ！ ぢゅるっ！ ね！ 良いでしょ？ オマンコズボズボ気持ち良いよ？ くちゅ！ れろっ！！」

「れろっ♡ くちゅ♡ ダメよ！ オマンコズボズボなんて！ れろっ♡ くちゅ♡ 手コキで我慢しときなさい。れろっ♡♡ くちゅっ♡」

なんとしてもエッチがしたい男の発言に聞く耳を持たないように、必死にベロを絡めながら右手でチンポを扱き続けるナミ。

男はどうしてもナミの膣内に肉棒をブチ込みたくて興奮してきたため、より身体を抱き寄せて女体をその気にさせようとする。

ナミのタンクトップおっぱいの左乳を自身の左の胸板で押しつぶしながら、左手はタンクトップの左脇部分から侵入させて、乳首を刺激し始める。

そして右手でミニスカを捲り上げてパンツの中に侵入させて、尻を刺激していった。

「くちゅ♡ れろっ♡ んあっ!？ こら♡ 乳首コリコリしないの♡ れろっ♡♡ くちゅ♡ ぢゅるっ♡ くちゅ♡」

男に乳首をコリコリされて身体が感じてしまい、より甘い声を漏らしてしまうナミ。

ナミにもっと感じてもらおうと、男は女体を弄る手の動きを強めていく。

左手の掌でナミの柔らかく温かい右乳を揉みこみながら、人差し指と親指に力を入れてより強めに乳首をコリコリしていく。

魅惑のナミ乳の柔らかさを楽しみながら乳首を摘まんで上に引っ張ったり横に引っ張ったり強めに摘まんだりすると、感じ始めた乳首が勃起してきて、コリコリしがいのある硬さになり、その変化がチンポを刺激してくる。

右の胸板で押し込んでいる左のタンクトップおっぱいの感触も、布越しでも乳首の場所が分かり始め、身体を足付けてはグニユグニユと好きなように乳肉を変形させた。

「んんっ!!! んくちゅ♡ れろっ♡♡ くちゅ♡ ぢゅちゅ♡」

(まったく、あんたの狙いなんかわかってるわよ! どうせ私を感じさせてまたうやむやにエッチするつもりね! その前に搾り取ってやるわ!)

クニユッ!! クニユッ!! クニユッ!! クニユッ!!

依然と全く同じような状態なのだが、ナミはエッチだけはするまいと抗いながら手コキしている右手の動きを強める。

目の前で眉毛をくねらせ、頬を染めながらペロチュウをして必死に手コキしているナミの姿は男の情欲を最高にそそっていく。

男はさらに尻肉を揉みこんでいた右手の人差し指を、ナミのアナルの中に突っ込んだ。

ズリュッ!!!

「んおおおっ♡♡♡♡♡♡♡」

いきなり人差し指の根元までアナルに侵入してきたため、思わず淫らな声を漏らしてしまうナミ。

そんなナミをもっともっと感じさせるため、男は人差し指でアナルを穿り始める。

グリュングリュンと回すように人差し指を動かしては、ナミのケツの穴を無理やり拡張させていった。

「おおっ!! おっ!! んおっ♡ ほおっ♡ ほっ♡ んっ♡ んんんっ♡ 勝手に人のケツ穴穿って広げるなんてええ♡♡♡♡♡♡♡」

眉を吊り上げながら、脚を蟹股に開きつつケツ穴拡張で感じまくってしまうナミ。

ナミの直腸は初めて異物を入れられたので、まだまだ硬さがあり、ほぐし甲斐のある直腸なため、男の指もどンドン力強く動いてしまう。

(んくっ♡ こんなケツ穴穿りに負けてられない!!! 私もちゃんと攻めなくちゃ!!!!)

「んおっ♡ ほおっ♡ んくっ♡ 舐めないでよね! 私はまだまだこの程度じゃ……くう♡ その気にな

らないわよ♡ くちゅ! れろっ♡ ぢゅるっ♡ ぢゅうううう♡♡♡♡」

クニゅんッ!! クニゅんッ!! クニゅんッ!! クニゅんッ!

アナルの気持ち良さに負けじと、ナミも舌の動きを強め、手コキの力を最大限にまで引き上げていく。

さすがの男もナミの身体を弄りながらの強烈なベロチュウと手コキで射精寸前に陥っている。

ナミに負けじと乳首をコリコリしてアナルを穿りまくり、唾液を摂取しまくる。

「ぢゅぢゅうううう♡♡♡♡ ぢゅっぢゅ♡♡♡♡ れろっ♡♡ ぢゅるっ♡ ぢゅぢゅっ♡♡♡♡ んあっ♡ ほら、早く射精しちゃいなさい♡♡♡♡ もうチンポがビクビクしてるわよ♡♡♡♡ 我慢してるでしょ♡♡♡♡ 射精しちゃえばすっきりするわよ♡♡♡♡」

眉を吊り上げて自身も快楽に飲み込まれそうになりながらも、挑発的な笑みを浮かべて男を煽るナミ。

男もナミを活かせようと必死にアナルを穿り乳首を弄るが、最高にエロい状態の中、男の肉棒はコンドームの中で爆発してしまう。

ドッピュウウウウ!!! ビゅルッ!! ドピゅッ!! ビゅルッ!! ビゅルッ!!! ビゅルルルッ!!!!

「んちゅっ♡♡ んあっ♡ ぢゅうううう♡♡♡♡」

射精した瞬間、ナミが男の舌を思いっきり吸い上げた。

女体を弄り回しながらの最高の手コキ射精に、男も気絶しそうなくらいの快感を味わってしまう。

「くちゅ♡ れろっ♡♡ ぢゅるっ♡ んふっ♡ いっぱいドピュドピュ射精したわね〜♡♡ ゴムがはちきれそうじゃない♡」

ナミが優しいベロチュウをしながらコンドームにたっぷりたまった精子の部分をツンツンして量を確認している。

実際コンドームには大量に射精された精子がたとりと先の方につまってタブタブしていた。

「はあ……はあ……ナミさん……エッチしたい……セックスしたい」

「んふふ〜♡♡♡ ダメに決まってるじゃない♡ こんな……」

ニゅルンッ!!!!

「くおっ!!!」

「手コキだけでこんなに射精しちゃダメチンポで、セックスできるわけないでしょ♡♡♡♡」

射精後の敏感チンポから無理やりコンドームを取られて、厭らしくゴム入り精子を見せつけられてしまう男。

ナミのその余りに厭らしいメスの挑発に男の興奮が再び高まってくる。

「くうう……じゃあ、せめてお尻の穴!! アナル舐めさせてください!!」

興奮のあまり男はアナル舐めを懇願しながらナミのケツの穴を穿った。

「んおおおっ!!!! んくっ♡ もう♡ しょうがないわね♡ そんなに熱心にケツ穴穿られたんじゃ、アナルが疼いてしょうがないじゃない♡ 良いわよ♡ 私のケツ穴、舐めさせてあげる♡♡」

半目の状態で頬を赤らめた艶のある表情で挑発的な笑みを浮かべてアナル舐めを了承したナミは、ゆっくりと後ろむきになってミニスカ尻を男に突き出した。

そして厭らしい腰つきで男の目の前でケツを揺らして挑発する。

「ほら♡ あんたの大好きな肉尻よ♡ たっぷり味わいなさい♡♡」

ハイヒールからしなやかに伸びた足に、突き出されたナミ尻でより厭らしさを醸し出している。

男は興奮で目を見開きながら鼻息荒く、ゆっくりとそのデカ尻に顔を近づけていく。

ナミは厭らしいTバックを履いており、広げられた尻の割れ目から、少しアナルが既に見えていた。

「はぁ! はぁ! はぁ! いただきます!!!!」

男は勢いよく顔を押し付けると、舌でTバックをずらして一気にアナルに舌を突っ込んだ。

ニュルッ!!! ニュルニュルッ!!!

「んあああっ♡♡ はああああっ♡♡」

先ほどの人差し指とは違って、今度はニュルニュルでブヨブヨの舌がアナルに入ってきて、生温く少し気持ち悪さを感じる異物感で悶えた声を出してしまうナミ。

そんなナミのアナルを男は力強く舌で犯していく。

「にゅるっ!!! れろっ!!! れろっ!!! ぢゅるっ!!!」

男の指を入れた以外は未開発の締りが強いナミのアナルをベロンベロンに舐め上げた。

舌が腸壁を挟り舐めるたびに直腸は嬉しそうにうねうねとうねり、奥の方からケツ汁が溢れてくる。

舌から便って口の中に広がるナミの肛門の味は、少し苦みは感じるものの若さもあってフレッシュさがあるような感覚を覚えてどんどん身体の中に入れたくなる味をしていた。

何より、ナミの身体の甘い匂いと、ケツの味が合わさり合い、こんないい女のアナルを味わっているという事実が興奮のスパイスとなり、男の舌の動きを加速させていく。

「んっ!!! はあっ♡ はあっ♡ はあっ!!! い` い` い` いいいい♡♡ 良いわよ♡♡ あんたのケツ穴穿り♡♡ もっといっぱい私のお尻の味、味わいなさい!!!!!!!」

すっかり瞳にハートマークを宿して、口から涎を垂らしながらケツ穴舐めで感じまくっているナミ、

快感のせいでだらしなく両足を蟹股に広げて全身を痙攣させながらアナルにからくる快感に全身を痺れさせていた。

先ほどのアナル穿りで絶頂に導かれなかった分、こちらで快感を得ようとケツを振りまくって実を委ねている。

「れろんっ!! ぢゅるっ!! れろっ!!! んあっ!!!」

ナミの尻肉を顔面に感じながら、甘い甘いケツ汁を啜って興奮しまくりの男は調子に乗って尻を叩き始め

る。

パチンッ!!! パチンッ!! パチンッ!! パチンッ!!!

「い い っ!?!?!?!?!」

尻肉を叩くとナミの身体は弾け、アナルの締め付けもきつくなった。

ケツ肉を両手でスパンキングするたびに女体全体が弾けるように揺れて、その揺れが顔面から男に伝わってくる。

「い い っ♡♡ い い っ♡♡ い い っ♡♡ い い っ♡♡」

(なによこれええ♡ お尻舐められて♡ 叩かれて♡ 気持ち良いiiiiiiii♡♡♡♡♡♡♡♡)

眉先と目を吊り上げながら歯を食いしばりスパンキングケツ舐めで感じまくる泥棒猫。

今までさんざん男の事を興奮させてきたいい身体をした女が、ケツを叩かれながらアナルを舐められ蟹股でみっともなく絶頂してしまう。

パチンッ!!! パチンッ!!! パチンッ!! パチンッ!!!

「ん ん ん ん ん っ!!!!!! お尻の穴舐められて!!!!!! お尻叩かれて!!!!!!
イクウウウウ♡♡♡♡♡♡♡♡」

ジャアアアアアアア……

絶頂し、痙攣しながら潮を吹いてその液体がショーツから駄々漏れになっていく。

ナミの身体は激しく痙攣し、余りの気持ち良さで建てなくなってしまいそうなほどだったため、男が優しく支えてそのままベットにうつ伏せで寝かせる。

「あっ……♡ ああっ……♡ あっ……♡ あっ……♡」

そのままケツを突き上げている寝バックの状態であつ伏せになっているナミを見て、男の興奮がどんどん高ぶってしまう。

「ナミさん……せめてケツ穴使わせてもらってもいいですね? こんなエッチな姿見たらもう我慢できません!!!!」

興奮堪らなくなった男は急いでテーブルの上にあったコンドームをチンポに付けて、右手をナミの尻の上の腰の部分に押し当てる。

「センシティビティタイムズ!!!!」

するとナミの腰の部分にハートマークの淫紋が浮かび上がった。

「大丈夫ですナミさん!! ちゃんとゴムも付けて、感度は倍にしておきますんで、痛みの心配はありません!!!!」

「ほえ?」

そう言いながら男は、絶頂で意識が朦朧としているナミのヒク付いた厭らしい肛門に、興奮で怒り狂った肉棒を一気に挿入した。

ズリユリユリユリユッ！！！！！！

「お` ほっ！？ お` お` お` お` おおおおおおおお♡♡♡♡♡♡♡♡」

絶頂したばかりのヒク付きアナルに、いきなり極太肉棒が入ってきて、感度倍になっていることもあってか、すぐさまナミはまたしてもアナル絶頂してしまう。

ベットが軋み音を上げるくらいの全身痙攣で激しく絶頂しているが、そこに男の容赦ないピストンが重なってくる。

「行きますよナミさん！！！」

パチンッ！！　パチンッ！！　パチンッ！！　パチンッ！！

ナミの括れた腰をがっちりと両手で掴んだ中腰の凶悪ピストンが、感度倍のアナルに襲い掛かってくる。

コンドームに包まれた極太の極悪肉棒が直腸をギチギチに満たしたかと思えば、そのまま排泄するような感覚に襲われて、脳みそがくちゃぐちゃに掻き混ぜになるくらいの排泄と性的な快感がナミを刺激しまくった。

「お` お` っ！！　お` お` っ！！　ダメッ！！！！　これ！！！！　死んじゃう！！！！　アナル気持ち良すぎて！！！！　死んじゃうっ！！！！！！」

直腸の圧迫感と排出間に襲われて異常な快感で気が狂いそうなくらい感じてしまっているナミは、連続絶頂でめっちゃめっちゃになっていた。

つい先日までは性的なことを何も知らない未発達的女体が、今では膣もアナルも開発されてイキまくりのメスの身体になってしまっている。

男の極太ゴム付きチンポを受け入れては、抜き出す際に内側を捲れさせるほどの直腸の絡みつきを見せチンポに媚びまくり、精液をおねだりしている。

スパンキングで赤く腫れあがった尻肉も腰を打ち付けるたびに厭らしく波打って、その揺れを全身に伝えていた。

上半身タンクトップ姿でミニスカを乱れさせ、エロTバックをズラシてケツ穴にハメている下品な姿は最高に興奮を誘う。

何より蛍光色の黄緑色のコンドーム付きチンポをケツ穴にハメている姿がエロく、男の頭をイライラさせる。

「ん` ん` ん` ん` っ！！！！　ん` ん` っ♡♡　ん` ん` ッ♡♡　ん` ん` ん` ん` っ！！！！！！！！！！」

普段のハツラツな性格同様、大きな声で善がり声を響かせてケツ穴で感じまくっているナミ。

自身のチンポで実の力もあるとはいえ、しなやかな腰を逸らせながら寝バックケツ穴で感じている姿に金玉からすぐに精子が放りあがってきて射精を促す。

強烈な締め付けで引き抜かれそうな肉棒から、欲望の白濁液が一気にゴムの中に発射された。

ドッピュウウウウ！！！！　ドピュッ！！　ドピュッ！！　ビュルッ！！　ビュルッ！！　ビュルルルッ！！！！

「おっ!?!?!? お” お” お” お” お” お” おoooooooooooo♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

男が直腸の奥深くに肉棒を突き刺したまま射精したので、熱々のコンドーム精子が下腹部にタプタプに溜まっていく。

(お腹熱すぎ!!!! コンドーム精子がタプタプしてるううう♡♡♡♡♡♡♡♡)

身体の特にケツを痺攣させてナミは今日一番の絶頂を感じていた。

ブビュッ!!　ブヒュッ!!　ブビュッ!!!

だらしく開き切ったケツ穴がチンポを排出するため、下品な音を漏らしながら空気が抜けていく。

その勢いでゴムチンポが抜けて、ナミのアナルは大きくヒク付き、そのガバガバの状態ですげに精液を輩出していった。

「はあっ……♡ あっ……♡ はっ……♡♡」

(無理……♡♡ こんな凶悪チンポに……♡♡ 勝てるわけない……♡♡)

ベットの上でだらしく尻を上げて意識も朦朧の中、敗北を感じるナミ。

男はそんなナミのケツを右手で叩くと撫でまわし、改めてケツ肉の気持ち良さを感じながら、この女を自分のモノにすることを硬くケツ意していた。

「はっ……♡♡ はへっ……♡♡」

ハートマークの瞳で舌をだらしく出したままのアへ顔を晒したナミの表情は、何処か幸せそうなものだった。